



本月宵鄙物語

六

~13
3962



門へB
號3962
卷

月宵物語後談卷第二

浅間嶽電也

江戸 桃華園 著



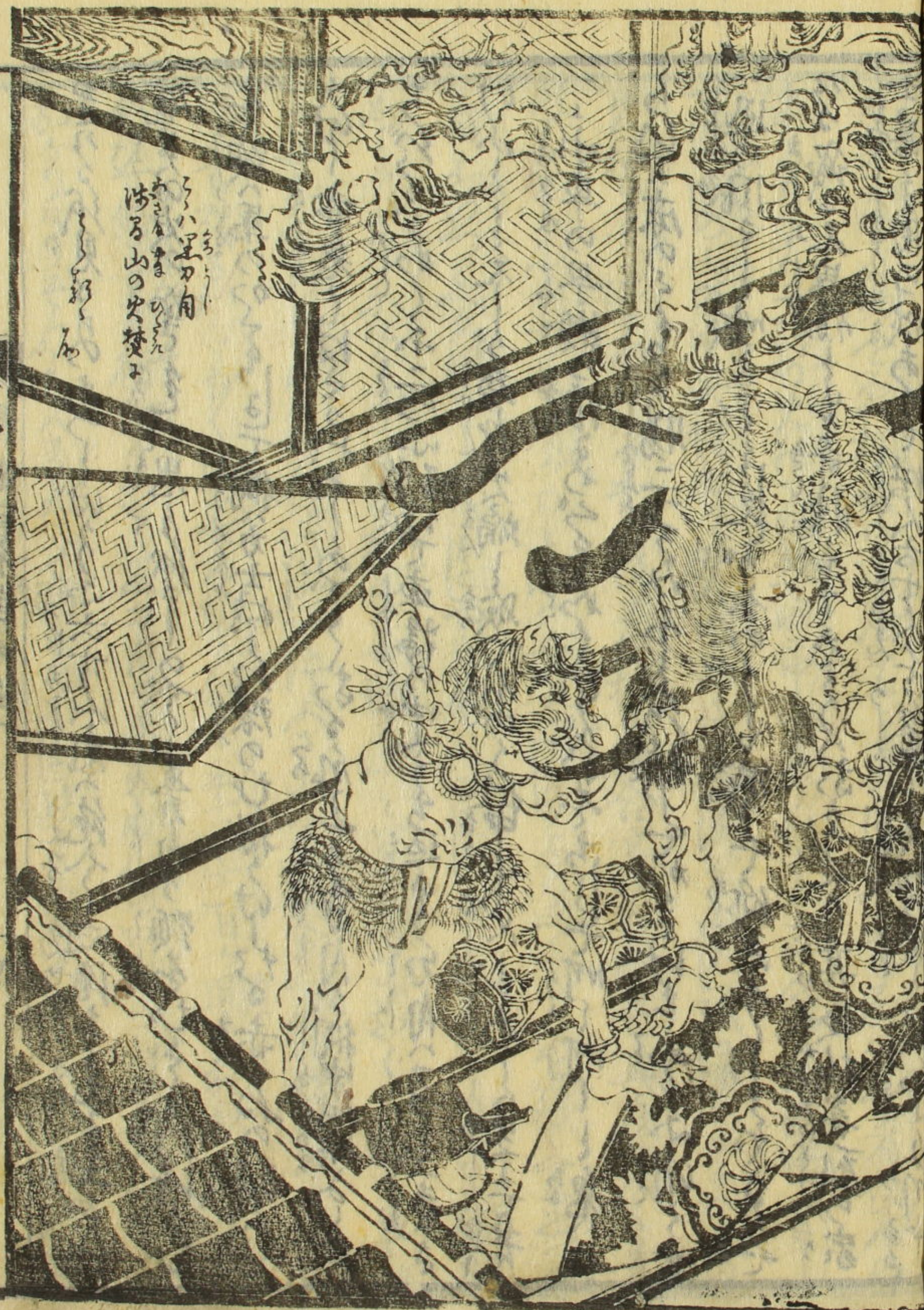
夫信濃の國淺間がどけとの六日本三箇の後嶺はて士峯小治がなる
高きなり北上野の國あうのつりをもなつて南三原の野を
を合せり東西三里二千余町が向植科依久の兩郡子まうかり
小りえて扇殿のうちより烟を世彼火籠の皮毛を織て火尻布をつれ
るゆはじの越無もかやとほり思りて幽谷二百七拾二の農産有て
其草花世赤石を生中中りおとけ若地獄がたま猿と猪が下あど
りる所ハ人跡のおよむるおわびぬ峯窟空をうき雲の外ま絶
壁の屏風をそそ懸間雲はつくねと巻鼻小向のつらねれん
半壁より霞あした小橋より雨をたせりかれは霞霧にまじりて

柳の語後談卷第二

まといて糧饑身かくまのすかいらるを昔よりけしふ火焚といふの
 きみはよをいひつゝのせども雅有て見ふ所のあつてもあつても
 けしつゝの税を志してする事なれどもあつてもあつてもあつても
 いふはまはるの氣象なり申すゆへ山嵐の瘴氣をば火端は
 けしつゝの種々の美形をあらじあつて雨雲ふれしと申すは
 悪事なれどもなる家のうらさびき事なりて天火とあり此等此等の者又
 午段馬路等たつちと見えん地獄が吾の釜中より出で火は車止にて
 むらひ事ありや向あつて地獄に落ちしと申す事ありと此も眼の
 おもひ見しつゝのあけまた人々をばおぼろのあつてもあつてもあつても
 元來地獄極楽等の事ハ仏説の虚言はて虚言の方便なりと申すの
 ねども臨終の観念のつゝもあつて人鬼常位のん中かして不義
 飛道をたつたの輩はふより無量の悪魔をかへむとて悪事のきこふ
 ねよんといふより地獄極楽鬼畜生の三悪道もわづらひしもたつた
 志うれば諸善を行の家又あまらざる程の慶をかへて往生淨土の因を
 結ぶ事始てうゝがたき事なればあつてもあつてもあつても
 向ふの事なればいづく極の辨くといふのふ愛比し辨くといふの
 又切を經て磁石の瘴氣を感じつゝつゝのふ火車といふのあつてもあつても
 の間にあつてつゝゆへに氣のまはる間をうかひ辨極のひまはつて
 死人の尸小魔はつて悪事の空虚を付入り生らつてのあつてもあつても
 けしつゝゆへに世間そのなり又る事なればあつてもあつてもあつても
 けしつゝ多しありといふ事なれば非見の黒い多しあつてもあつてもあつても
 其火車まはつてあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

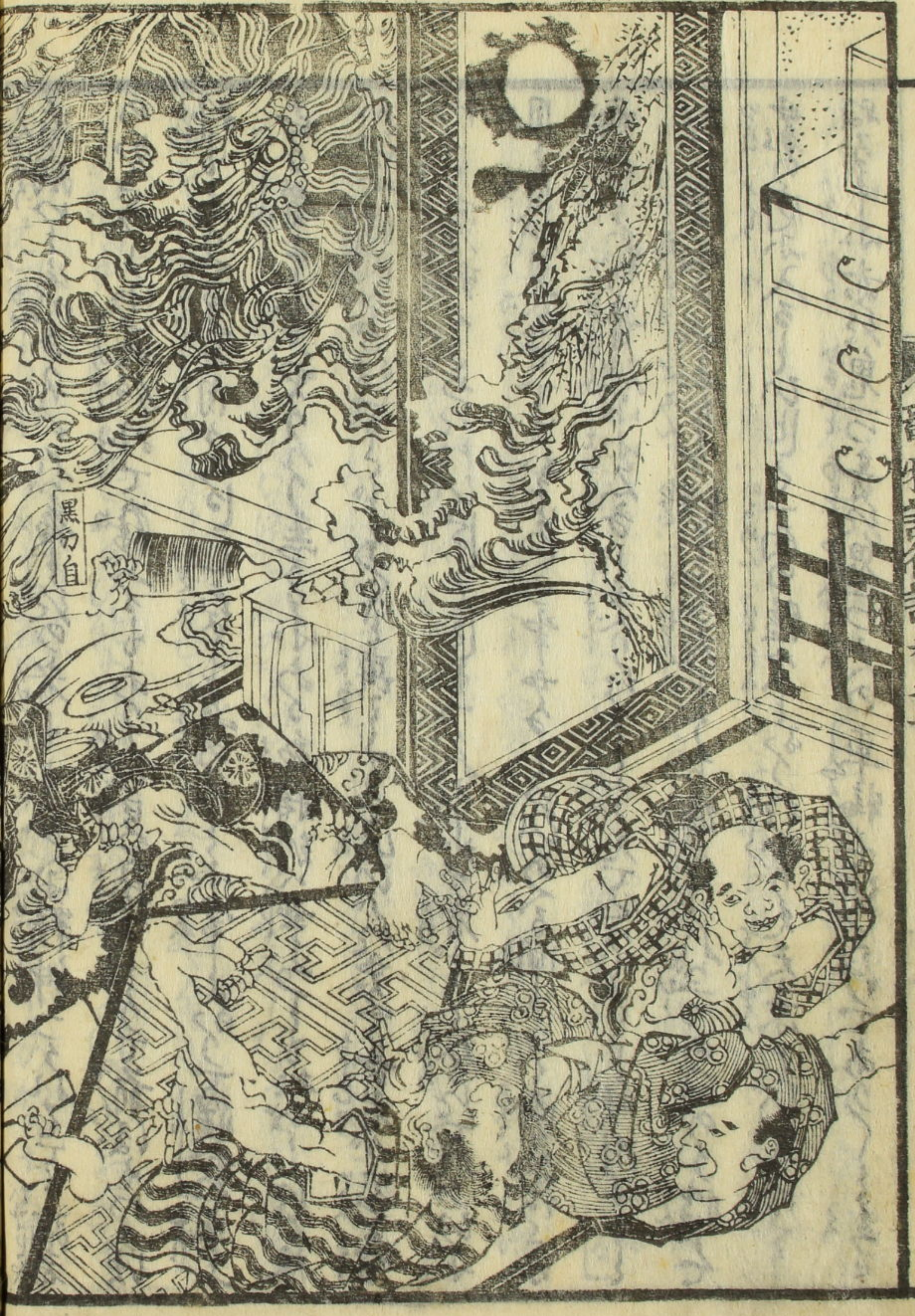
善行のいふはて悪くても猶あるるにのい悪行のむらひるう休屋
 の長者といふは國ふるふがうまき其富ののる果といふ成宿世に
 因縁やありかたえまき現世の難やその身ふえらう人かふる黒刀月が
 如き悪人を妻として世間小鬼とまよふせつ家の名をけはては深に
 らもまきこいまるく夫より黒刀月がゆふの目せかたぬて重り神相伝増の
 祈念よもまほさく名医良劑の術ふも更子効りて悩れまきくま
 ちじく始めはやどより食物一粒うもも食すことあはしては湯
 小一滴をも通さば肉は落て麻のふれさうりりせ不たがう骨小
 皮をまきさるふ似たりや息も切るんあまや命も絶たてるん
 と取肉もむむほしてらひ死に死なる半成待より外のこをまき
 妙病をむめ下り成うこ凡十四五日かるとの同益と疾とのわらちまき
 看病のいふはて悪くても猶あるるにのい悪行のむらひるう休屋
 のかこふふ其修行で寝るもあつ人の足と枕よりして前後もわら
 けもあつて足方自がほじしまも耳のりも小常ありて腹食と妻
 する者まもあつたりまらふある夜時刻に丑うつらねがうた後
 かひ小波間がけけはてまらうと再ううてはひひらねあて長者が家ま
 わらう震動をこめればじくにもつれかる者より寝たてたかひ小
 月と自以見合せてもかまほの半まるといある間も自ら雨ふらる
 雨あつれ音ゆふふんまどまりたりとててくくく吹附まき
 わりな雨ふゆふが程を徹者よりち輝きらねいつの日のう特ど
 家の内ふ入るしじく一面の燈火とあり程ふりえ天ふまびらうら
 ぬる中小赤た鬼つ音た鬼つ尖の車輪をいつまげてありくとま

昔物語言平言者三



くハ黒刀自
あまの山の大焚子

黒刀自



黒刀自

黒刀自

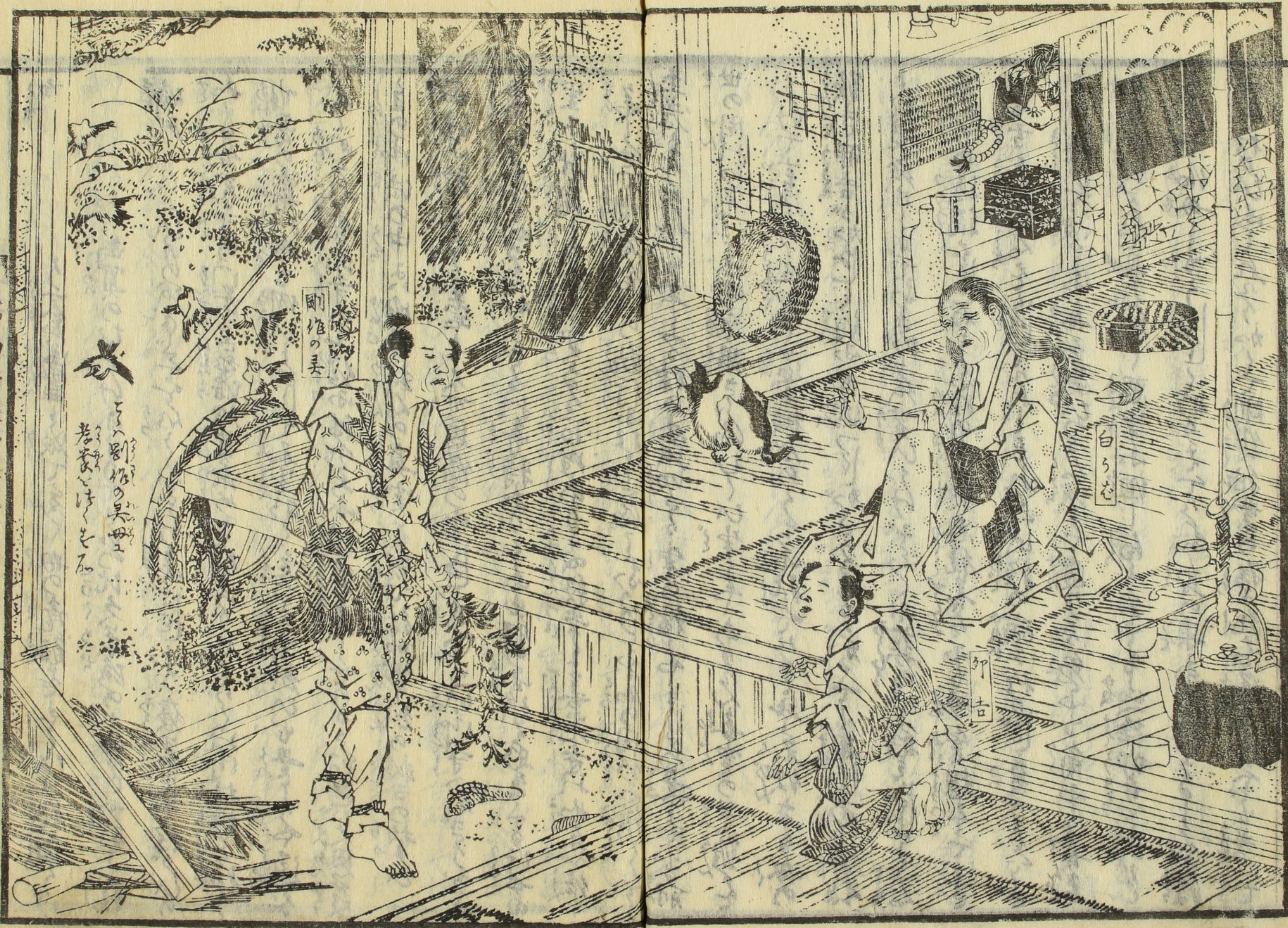
至る所見るものあつとばかり小六十八人衆の絶へて同儕を先よきと
 硫黄の火の等き色に鬼多紙の冬く馬方角頭をむぎと引はむ
 を頭へ馬のかしらほして綱方士はた隊のむねのけしなる赤がねのなすを
 うけ赤鬼くはるはわいのとある凡そ馬方角頭中隊隊さび
 ちだるふわく小三つ小切で車輪の中うも返さう刀角ハツと一ま
 けぶとこえが熱身火煽て成てるの申小六十八人衆と共
 つ小車の早瀬の浪もぶぶくひたれをちしそ何と何と鬼わ
 らひて床のこちも勝二つみやぶ残してかまけきやう小清くせ
 一迅の風と吹よとえんがのうも減してゆきんくくぞりそ
 なる幾も不思議とも奇煙も中をうへあうりう其夜柏葉殿の家
 士某角の供ありて供人六十八人を百果大綱の黒しり川中
 名島の後一場を虫相原の陣屋で隊を遣ふを菅原の長者は屋の
 あうりより一陣の火はは出て空中小まうわり三原野に未申一
 て浦向の山の中央地獄が火のあうりも落ちるとはは語りうへまの
 火焚草中ありり半後まをわひ合せうりやて其夜人々
 のころもふゆて長者のりふい再よこは血のまをりを幾と馬刀
 自をうづさうたういひにやさぬぐまはじりともまもつる級も
 ちぶさり小うりうが歎き小惚惚といふ人々もあうりかきまを
 ささうりあうりうりらればはをはぶさ小宣御中て緒傍をまねま
 供書残るかとも進長をいふと二十七日が剛大蛇隊鬼等
 初び修善寺行意のふく足刀角が未成伝の切徳の外は矢も他事
 あうりうりそれらうりうり痛り見ふは速疾方小むびまう小仙へ

ひさうて人の眼をもちるうらみは今の毎刀自とひ人もわらう
 性我將豪情はこよたゆぶもあふぬわぶたえあふぬくもあふぬ
 性あの中も悪い余欲の遺ま純をもちる程そんか知りともかく
 おいすく物をねとて畜類だやも純ををほい毒程能道ををるり
 だて金銀をたぐつればふ五年が圓をまうはげて家産は
 ち年五十歳してあ中の病をけ面色崩れく小女まねとるへ
 口先とかり歯ををみ目眼ははゆのこく小似て只くたあまのこかき
 らりさほくのた言然のいつて身の悪事成をを唯く合好
 てりくは純ををい志あていりの毛がわじ臨終のまふりるを太
 らる猫の如きりの来りて娘をけあさう成志をかふひるをとかあひ
 つねい能死たすへとめり豊ひとよ毒を毒はて身小教訓のた
 ち僕能飛送紙約いなるのむらいまのあさう小舟無せし夫は
 動ふじ及びて神も併し見そまひせたまふるあさうたえんはしく
 半のの成もむいふかは能飛送ののまむく細そる家のま
 けりさふたという程なうじいふあさうかまきくや遠くらんも
 け業周のそまをさる程は能が身はなまきといふ進のわぶといの程
 のたえけり半のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 人ものあふ人をもと人をもと人をもと人をもと人をもと人をもと
 あさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 僕あてたれもあしれもあしれもあしれもあしれもあしれもあしれも
 の曾平ゆやと且悔且歎きて遺約たる人の身のおやまを政
 ちとさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

のそりばざしとすすかしむるゆゑ人にて貧乏戚憂の人のそりばに
 てあつしむるもふか不義にして安なる家を先祖の富はして心ゆ
 かり返しつるまればとて思ふ小まのりてゆかば家でも祀さ
 申し山の如く小積うさの丘の如くはたぐりたる金銀財宝積るのそり法
 純布物小分散せんとおひつちる人の積貴しといふ余りたりたし
 而も家の宝を一つとて不買の長久を行るとも家の積悪の余徳
 消滅せられ悪業の因縁をかくとのやうに作の理をたぢ
 未来の脱の果をおるも身は首の舌根さられ鬼神の眞助子願り
 くらざる申かたに申りとも知るぞ申すあり

水内川の孝徳

志ありたる後不更級山の篠原の寂莫村の剛作いま人の母親白く
 至孝ありりれども年なる植の本派切る半の積りまふ是とて前
 世の因縁ゆゑにふを果さばゆひい申すもありん事案の災難を
 くらけて言ひけまかて逆子被屋のうもふ死てらるや不使する母の
 歎き申吉がばしと細おも述つじがさうらうかくても果しあはれ
 よれば病りもあてあまが瓜貫ひけそりお葬のつらきはじこ
 衣かりの遺福をばねる心屋の夕暮悪後善ちゆも早愛想をてま
 しも奇き郎小んをらしてられとそれいけ程の病やわのじを憂りま
 る瓜獲ひて後まお母を失ひつるん地へ還るが鬼心も角中も善
 おまといつるは是れ悪事小組し向うをとも山(捨印)をともつ
 直して伯母ももうししく形をてらるが女の果あをれいも人
 おぞねひあられうかくて剛作の積業の病を逆るともいも孝ん



剛作の妻

この剛作の妻
若衆とけくを
る

白くむ

卯吉

新編 浮城物語 卷之二

と云

二念返靈と成て多く母の危難をまひひらば向うに
幽冥のたまけふよりそまの比久米路のうけに小籠く指

確

ひりの成もどをふくたまけふ世より寝美にて終ひの

かく善光寺の門前家地獄賞求めたまつり世にぐけ御持持を移り

唯香の瘠れ烟も何いとて不空好くまつるまが成ひも豊しりや通を

んをぬえ善光寺の御所移るる小借衣系くせりるる世に大恩及

自の御法の中へ唯悟戒心の真実を説て孫陀本願の救世の御まひら

山法ふ放くころも不可思儀の中世に下りし御寺小がきりうふ

更におのいそかるなかくるれ身持ありて小出野の御成と成まゝる行中

里小に花苑といふを定する石壁ありて親常と善光寺に御来と依

系して唯智念の御行おはるるはるるありし御所の御小籠く

くふあゆみ成るとびつとるる門前の町家も縁起して御成の系後をせが

むきたつる中へ御村を去り歳世成は牛飼の重花といふ所の小成遊

もく小僧屋の店まゝるる會比小物語りおまね又指するといふ御父の助丸

郎といふ所の母も去り身まかりたるが隠終り美なる衣類を著して換

く過去の御成の圓の御持もるる腹たる御物のまゝ成り御成

成りして墓所も水のわげとひるるに後へこれよとの程も成り約せり極

小成りて其まじと見せられは皆あつて夜談も出しつるが御成も

成りて見ればとその成り成りてあり持来りたるまじり人成りおまじし

遠くを別府と合するがふくおまじり人といふ御成も其不思儀の事

成りて且墓所成りたるをいふる御成も移せりしころかゝる身具の事

これのふらふらとて縁起人の目も唯常成りたるのみとえりたるは



本
切
吾
良
止
...

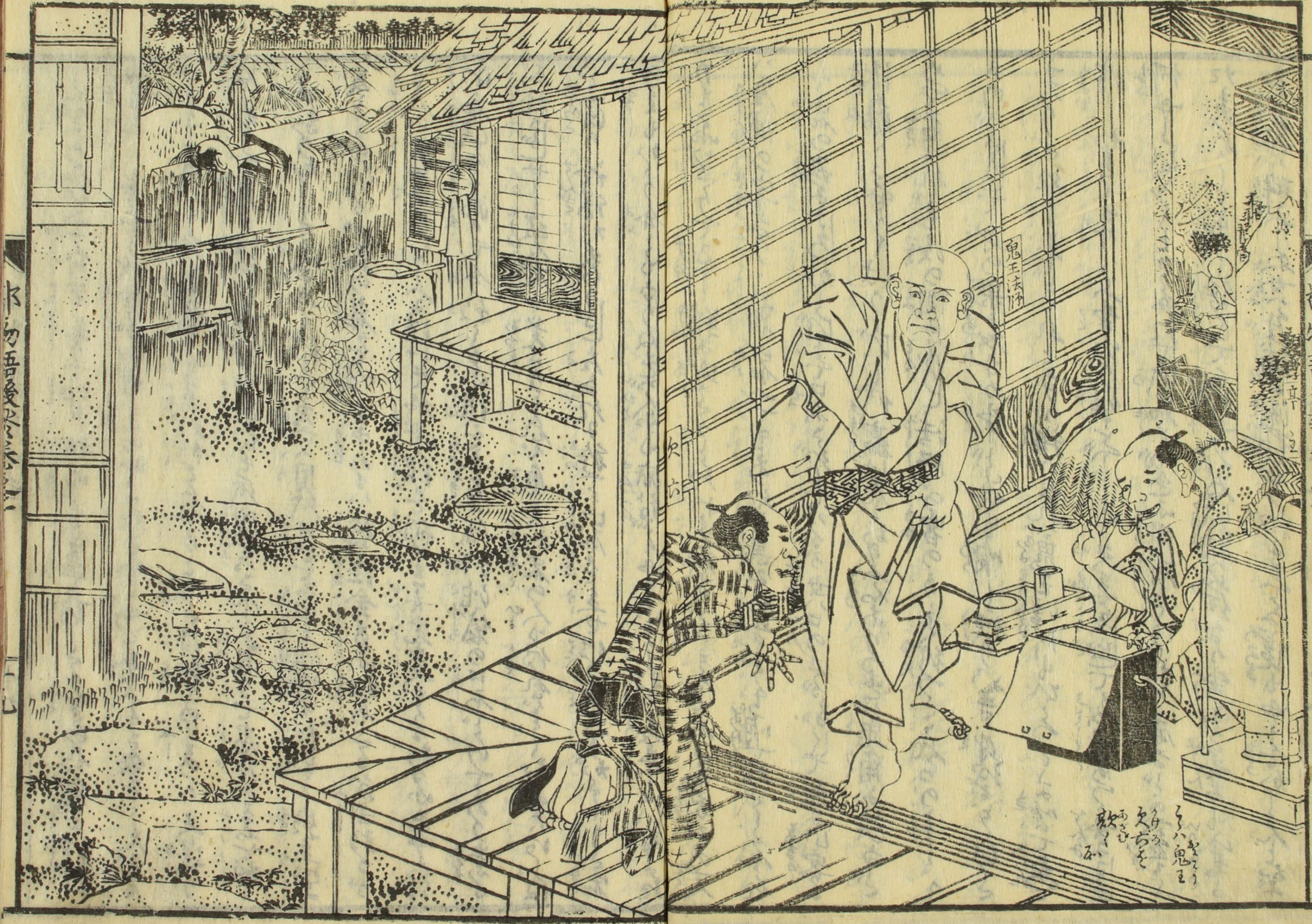
二人の
悪者
...

文
六

善
大

...

かの女ふもいぬくし根の才良て見へは間をさす不待金と約速てらまよ
 り夜ふくぬげぞいふ世に田中の窪町なる今うろ掃きとらふのくおまぐ
 きあふ下といつて世に女も母也かかる者不ほひは流し節もらじ
 とあの人を逢ふた時節も先鬼もる角もあれはそこ共ゆれや見え
 るれる紙待く温泉を祖を逃去は流うぞりお世城山紙と急ぐ程も月を
 おぼろくと送あうりはれり程暇もぬく速てわく回とらる里のわらうら
 の石ぞ物りり扱つるお骨れ流さわらぶ鬼やせん角やと道のそ
 るるも腰かけ人里おせられたるいもさうとやして申ふ人と再とまほ
 て物音はまきか鴉林も味お青煙をりより外それとせりありのもあつけ
 れ女ももまきとあひさうとおれさかしくあありとすも捨るけまを
 びで倒るまよの歩で踏も狼もあれをぬるさうとあえのどと月のがら
 をねるお空夜や仰おの念しうの程も三と交ありはうりか間ふ掃の宿の
 裏面ある家の腰をぬるうの女も先は家をねをねを明とやとま
 より見まの家のあはては世るりそれのまはは明のまえて内ふの家
 のひをあくの世屋守の世守もあをそままかけて妻はるやけ者もく
 秋まかろ難民せりめあり程一助けありけといひるまを内ふ例の
 休屋もあはのた悪者善者と二人除穢酒を飲てうとつらと悪事れ
 此等つらもろ碑もより何の看のまをを恨もあれやいひるたるあく
 女のまのあてらるははてより狐もやあふら程もあはまをまを真
 崩れかりたる鹿押喧まの善も一目見るより何の密もあれ先とふ令
 酒に香も下とまらる上まで狐程もふ狐程のまもあはうりんとてま
 名と膝のあより何のあつしく見ふ常の女もあはれはうらまふもあま



木
勿
吾
愛
心
云

鬼
王
法
師

鬼
王
法
師
卷
之
二

鬼
王
法
師
卷
之
二

是より焼持ぬを一日せよ申とわりのり盛まる女のことあるは中へ樹
 邊をうかくとわかく入圓天かほ逢うやま邊よりいそいで尋ね逢ふ事
 あらふ事あるんがて逢ふ我と共に小来るがういそいで見候もわび
 かて逢ふ事あるが付しあふかて逢ふとて附そふ部ふは逢てをくれ
 強きんとむい見たまふてく草鞋の店もきれきけりてを調へ逢り
 たり逢てこれ逢持たるけりて逢りてとある木のゆふををねば逢つ
 欠古のゆふけり逢持たるけりて逢りてとある木のゆふををねば逢つ
 いふるうらると逢持たる見せりてかたり逢りて逢りて逢りて逢りて
 るう逢の逢て逢りて逢りて逢りて逢りて逢りて逢りて逢りて逢りて

月宵都物語後談卷第二終

